

氾濫原生態系の再生に向けて

代表理事 塚原 浩一

流域治水への転換は、環境・生態系の取り組みにとっても、改めて河道中心から流域・氾濫原へ本格的に踏み出す大きなチャンスだと思う。

生態系の成り立ちやメカニズムを、河道だけでなく流域、特に氾濫原スケールへと広げて正しくとらえ直し、人と社会の営みとの関わりのなかでその価値を見直すとともに、治水の面からは流域・氾濫原の自然環境・生態系が本来有する防災バリアとしての機能を見直すことが重要だと考える。

これまでの治水対策による築堤や河道の固定化は、洪水現象を人間の生活や生産活動から分離し、農地の拡大・安定化、生産性向上、都市の発展や経済成長などに大きなメリットをもたらしたが、一方で河川と氾濫原が分断されたことによる自然環境・生態系へのダメージも大きかったと言わざるを得ない。

多自然川づくりや自然再生事業など、これまでも環境・生態系の保全・再生のための取り組みが進められてきたが、すでに河道はほとんど固定され氾濫原とのつながりが制約されたなかでの取り組みに限定されてきた。

しかし今、温暖化とともに流域治水へと舵が切られ、河道のなかで洪水を防ぎきる前提が変わり、必然的にパラダイムが大きく変化していくことになると思う。

かつての氾濫原は洪水のリスクと背中合わせでありながら、豊かな自然景観・自然生態系があり、人の営みもそこから大きな恵みを享受してきた。生活・生産活動の場に向かいすぎた氾濫原にもう一度治水の負担を求めていくことにともなって、河川と流域・氾濫原の関係性を環境・生態系も含めて見直すことが必然だと思う。

流域・氾濫原に単に治水の負担とリスクを求めただけでは流域治水も思うように進まないのではないかと危惧もする。氾濫原の治水上の価値を再発見するのが流域治水の核心のひとつであるならば、あわせて氾濫原の生態系としての価値も見直すとともに、流域治水の努力と工夫のなかで氾濫原生態系を再生する可能性を追求していくべきだと思う。そうすることで、社会としてのさらなるモチベーションが生まれ、流域治水のなお一層の推進にも貢献するのではないかと。単に河川と流域・

氾濫原のリスク分担という図式ではなく、社会の新たな価値観の創造につなげていくことが重要だと思う。

そのような流れのなかで、これまでの多自然川づくりや生態系ネットワーク再生、河川生態学術研究などにおける河川・流域環境のための取り組みがより密接に治水とつながり、さらに真価を発揮していくことになると思う。治水の取り組みを流域スケールでの多様な取り組みに広げることで、河道計画・河道管理も、より河川環境との一体的な価値観のなかで進められることが期待される。

さらに、流域治水には多様な主体の貢献が求められることから、必然的に環境・生態系の取り組みにおいても、これまで以上に流域・氾濫原の多様な主体の参画と協働を進める必要がある。例えば「小さな自然再生」のような市民参加・地域協働型の取り組みの意義もこれまで以上に高まっていくのではないかと。

このような取り組みを進めるには、治水と環境の相乗効果をいかに図るかが重要になる。時にはトレードオフの調整も必要になるかもしれない。それを具体的に動かしていくのは第一に科学的な知見であり、そのための様々な研究成果がどんどん出てきている。これらを結び付け、体系づけて実用に移し新しい多面的な価値を河川とその氾濫原に実現していきたい。治水に貢献する氾濫原の機能と多面的な価値を科学的・技術的に位置づけるとともに、その生態系サービスの価値をこれまでとは別の経済価値、持続可能性、シビックプライドの実現につなげていくことが温暖化・激甚水害時代の社会のソリューションだと思う。

例えば、円山川などの先進的な実践事例が既にある。大規模改修とあわせて氾濫原生態を意識した自然再生を進め、コウノトリなどの生息・生育・繁殖環境を再生してきた。今回の特集でも、これからの氾濫原生態系の取り組みの方向性や素晴らしい先進的な知見・取り組み事例を示していただいた。このような科学的な研究成果をさらに進化させ、氾濫原に治水と環境の相乗効果を発揮させる取り組みがダイナミックに進むことを期待している。